

Cure to Care

第 6 話

與儀 達朗

【登場人物】第6話 * () は旧姓

町田 翼 (3 2) : 救急・訪問診療医

鈴木 舞 (3 2) : 訪問看護師

村井 正和 (5 0) (3 5) : 訪問診療所院

長

五十嵐 隼人 (2 8) : 訪問診療所アシスタ

ント

金城 (坂本、加藤) 恵

(3 6) (2 4) (1 4) (6) : 訪問診

療所アシスタント

山崎 香織 (5 5) : 居宅ケアマネージャー

鈴木 健 (5 2) : 外科部長、鈴木舞の父

八木 直久 (5 0) (3 8) (3 5) : 救命

センター部長

加藤 一志 (7 0) (4 8) (4 0) : 金城

恵の父

坂本 (加藤) 悦子 (5 5) (4 5) (3 7)

: 金城恵の母

坂本 真智子（64）（52）（42）∴金

城恵の叔母

加藤 丈二（65）∴一志の弟

金城 朋也（40）∴金城恵の夫

金城 凧（7）∴金城恵の息子

鈴木 真由（50）∴鈴木舞の母

松村 元気（28）∴訪問薬剤師

石原 翔（37）∴外科医

中田 稔（85）∴施設入所患者

中田 智（55）∴中田稔の長男

井川 遙（50）∴中田稔の長女

村田（30）∴取り立て屋

田村（30）∴取り立て屋

川崎（50）∴看護師リールダール

ケン（50）∴村井、八木の当時の上司

【あらすじ】（第6話）

金城の元父親で、がん末期在宅患者の加藤を主治医として担当することになった町田。管理に悩みながらも、周りの助けもあり、徐々に加藤の症状を和らげていく。町田は、加藤と金城の関係に大きな溝を感じながら、終末期の加藤が抱く思いのために、主治医として邁進するのであった。

第6話 「終末期」

* 「金城恵」の柱書きやセリフ名は「金城」から「恵」へ変更。

○同・オフィス（朝）

五十嵐 「加藤さんが、金城さんの元お父さん
……」

五十嵐隼人（28）と町田翼（32）
は衝撃を受けた表情を浮かべている。

村井 「今回の訪問は週一で行おうと思う。ア
シスタントは五十嵐くんに同行をお願いし
たいと思うけど大丈夫かな？」

五十嵐 「はい」

恵 「院長」

金城恵（36）が村井正和（50）を
鋭い眼差しでみる。

恵 「気を遣わなくて大丈夫です」

村井 「金城さん……」

村井が心配そうな表情を浮かべている。

恵 「一人のガン末期患者さんとして、接し方

が変わることはありません」

恵はにっこり笑うが、目の奥は笑っていない。村井がやや心配そうな表情で恵を見て頷く。町田も同じく心配そうな表情で恵を見ている。

○前田救命センター・CT室（夕）

CTの台に乗っている外科部長の鈴木健（52）。撮影が始まる。真剣な表情でCT室にあるパソコンの画面を見ている外科医の石原翔（37）。画像を見終わった石原の表情は曇っている。

○加藤家・玄関先（夕）

雨が降っている。玄関先で傘をさしている町田、恵の二人。玄関先のインターホンを鳴らす町田。玄関の扉が開いて、加藤丈二（65）が姿を見せる。

町田「村井訪問診療所の医師の町田です」

恵「アシスタントの金城です」

恵の顔を見た丈二は、何らかの既視感を感じる。

丈二「兄貴のことか、どうぞ入って」

町田と恵を、玄関に入れて扉を閉める

丈二。

○加藤家・寝室（夕）

丈二が町田と恵の二人を寝室に案内する。町田が部屋に入る。

町田「失礼します……」

加藤一志（70）がベッドに横になっている。ベッド横で訪問看護師の鈴木

舞（30）が酸素飽和度を測っている。

舞「町田先生」

町田「お、鈴木」

一志「なんだ、顔見知りか？」

舞「町田先生とはよく一緒に仕事しているんです」

一志を見て、舞がにっこり笑う。

一志が痛みで顔をしかめながら、上半

身をゆっくりと起こす。訪問診療所の
名札を見せる町田。

町田「村井訪問診療所の医師の町田と言いま
す、よろしく願います」

一志「あんたら随分と若いね。俺の娘と同じ
くらいかな……」

寝室の外で、書類を取り出していた恵
の手が止まる。恵の表情が曇っている。

町田がさりげなく扉の方を振り返り、
直ぐに一志の顔をみる。

町田「主治医として加藤さんに向き合います
ので。何か辛い症状はありますか？」

一志「病院の先生に、骨とかにも転移してい
るからって言われたけど、痛いんだわ」

町田「辛いですね、痛み止めを調整しますね」
舞「あと、加藤さん息が苦しいって。酸素飽
和度も低いわ」

町田に測定器の画面を見せる舞。

町田「在宅酸素かな……金城さん」

寝室の外にいる恵に向かって、いつも

の調子で呼びかけるが、直ぐに自分の発言に後悔する町田。恵が寝室に顔を見せる。恵を見て、気まずそうな表情を浮かべている町田。一志が恵を見て驚いた表情を見せる。

一志「恵……恵なのか？」

一志が恵の目を見るが、恵の目の奥には一抹の怒りが宿っている。恵は軽く笑みを浮かべながら一志の方を見る。

恵「加藤さん、酸素療法で呼吸苦は良くなってくると思いますよ」

恵「町田先生、手配しとくわ」

町田を見て、部屋を出ていく恵。

恵の後ろ姿を心配そうな表情で見ている町田。

一志「なあ、町田先生……」

町田が一志の顔を見て、黙って頷く。

○村井訪問診療所・オフィス（夕）

オフィスの電話が鳴る。電話の受話器

を取る五十嵐。

五十嵐「はい、村井訪問診療所です。え…：
わかりました」

五十嵐が町田の方に目をやる。

目があう二人。

○加藤家・寝室（夕）

一志が興奮状態になってベッド上で

暴れている。舞と丈二が必死に一志の

体を抑えている。部屋に入ってくる町

田と五十嵐。

町田「加藤さん！」

舞「レスキューで舌下錠を飲まそうとしたけ

ど間に合わなくて。多分痛みでせん妄を誘

発したと思う」

町田が、一志のそばに駆け寄る。

町田「少しお体が混乱しています、落ち着く

薬を注射しますね」

町田が一志の上腕を消毒している。

町田「五十嵐くん、セレネース用意お願いし

ていい？」

五十嵐は針付きの薬剤入りのシリンジを町田に渡す。舞が五十嵐の手際の良さに驚いている。

上腕に筋注する町田。筋注後、徐々に落ち着きを見せつつある一志。

町田「鈴木、アブストラル舌下投与して」

舞「わかった」

舞が、薬剤が入った袋から、錠剤を取り出して、一志の舌の上のにせる。

○同・廊下

舞と町田が立っている。

舞「加藤さん、意識はしっかりしているけど、持続的な痛みの強さも上がっているし、突発的な痛みにもすぐには対処できないわ」

町田「そうだな……」

町田が苦い顔を浮かべる。

○前田救命センター・面談室（夕）

石原が座って、曇ったような表情で電子カルテ上の画像や検査データを見ている。面談室の扉を叩く音。

石原「どうぞ」

鈴木が入ってくる。

鈴木「すまん、無理言って検査してもらって」

石原「いえいえ」

鈴木「検査結果がそろったって？」

石原「はい」

石原が浮かない顔で鈴木をみる。

鈴木と石原が互いの目を見て向かい合っている。

石原「部長、これから話すことは――」

石原の言葉を遮る鈴木。

鈴木「悪い知らせなんだろう？」

石原は腹を決めている表情の鈴木を見る。

○同・外観（夕）

土砂降りの雨。

○同・廊下（夕）

救命センター部長の八木直久（50）
が歩いているが、稲光の音で思わず立
ち止まり、窓の方を見る。

○村井訪問診療所・オフィス（夜）

土砂降りの雨が止んできている。
町田が、自身の机の前に座って目の前
のパソコンで調べ物をしている。横に
は緩和ケア講習会の冊子や書物が置か
れている。何かを見つけた町田。
座っている村井の方に歩み寄る。

町田「院長」

村井が町田の方を見る。

村井「町田先生、どうしたの？」

町田「加藤さんの、疼痛管理なんですけど」

町田がノートパソコンの画面を村井に
見せる。村井が画面を見て顔をあげる。

村井「持続皮下注射か」

町田「どう思いますか？」

村井「確かに良いと思う。ただ、薬局によつてはやってくれないところもある。管理においては、訪問看護師さんや本人、家族の協力も必要だ」

町田「そうなんですネ」

○喫茶店・玄関前

曇り空だった空が晴れてきている。
店の玄関の上に L u c e C a f e
の表記がされている。

○同・店内

町田と五十嵐が昼食を食べている。

五十嵐「このパスタ、本当美味しいですね、隠し味とか正直、教えて欲しいです」

町田「確かに、パスタは初めてだけど、うまいね」

町田のズボンのポケットに入っている

スマホに着信音が鳴る。

町田「ごめん」

町田がスマホを取り出して、外に出る。

○喫茶店・玄関前

玄関の扉を開けて出てくる町田。

町田「もしもし、町田です」

松村元気（28）（声）「町田先生、電話しました？」

町田「ええ、ちょっと相談があつて……」

松村（声）「町田先生の頼みなら、なんでもいってくださいよ」

町田「実は、麻薬の持続皮下注射を使いたい患者さんがいて……松村さんのところって扱っていますか？」

松村（声）「もちろんやっていますよ」

町田「本当に？ 助かりました」

安堵の表情を浮かべている町田。

松村（声）「訪問薬剤師の松村、きっちり役に立たせてもらいますわ」

○加藤家・寝室（夕）

町田、五十嵐、舞、丈二が立っている。

松村が一志のベッドそばに座って点滴をセッティングしている。

松村「これで準備完了です、あとはよろしく頼みますわ」

松村が、町田に軽く会釈して寝室を去っていく。

町田「松村さん、ありがとう」

町田も去っていく松村を見て会釈する。

町田「加藤さん、痛みのコントロールが不十分だと思うので、疼痛管理が安定するよう
に、点滴を取らせてもらおうと思います」

一志「点滴？」

町田「はい、加藤さんの活動量や痛みの管理からは点滴が良いかと思いましたが……」

町田が、ボタンを一志と丈二に見せる。

町田「もし、痛みが突然襲ってきたら、このボタンを押せば、痛みは緩和されると思います」

ます」

一志が不思議そうな表情を浮かべて、ボタンを手に取る。丈二が感心したように頷いている。

一志「これで？」

町田「はい、そうです。もし安静時の痛みが強くなってきたら、点滴の速度を上げる事で痛みがコントロールできると思います」

町田が舞の方を見る。舞が町田を見て頷いている。

○同・廊下（夕）

舞「持続皮下注射って、その手があったね」

町田が舞を見て頷く。

舞「すごいじゃん」

町田「みんなの協力がないとできない。鈴木も加藤さんのこと、引き続きよろしくね」

去っていく町田の後ろ姿を見て微笑んでいる舞。舞のポケットに入っているスマホに着信が鳴る。スマホの画面を

見ると、「鈴木健」の表示がされている。

○鈴木宅・居間（夜）

外科部長の鈴木と舞が向かい合って座って、夕食を食べている。鈴木の花の鈴木真由（50）が、料理をテーブルに持ってきて席に座る。

真由「どうしたの？ 舞も一緒に夕食って、久々じゃない？」

鈴木「まあ、たまにはいいかなって」
舞が怪訝そうな表情で、鈴木を見ながら食事を食べている。
食事をしている鈴木の手が止まる。

鈴木「真由、舞。実は話があって……」
真由と舞が鈴木を見ている。ためらいの表情を浮かべている鈴木。

鈴木「お父さん……ガンなんだ」
真由の持っていたフォークが、手から皿の上に滑り落ちて、スープが周りに

飛び散る。

真由「あなた、何言っているのよ」

真由が、台所へ布巾を取りに席を立ち

あがろうとする。

鈴木「臍がんで遠隔転移している、ステージ

IVだ。化学療法をはじめようと思うが、完

治は難しいかもしれない」

舞「お父さん……」

舞が呆然とした表情で鈴木を見ている。

真由「あなた嘘でしょ。ねえ、頼むから嘘つ

て言ってよ！」

真由は椅子に座っている鈴木の両肩を

激しく揺すりながら、泣き崩れている。

○加藤家・寝室

酸素カニユールをつけた一志がベッド

で寝ている。町田が訪問看護やヘルパ

ーがつけている日誌を見ているが、食

事量が徐々に落ちていることに気付く。

ちらっと在宅酸素の機械を見ると、流

量も上がっている。

一志「点滴にしてから、だいぶ痛みも良くなってきたよ、先生ありがとうな」

町田「何か辛い症状があれば、遠慮なくおっしゃってくださいね」

柔らかな表情をしている町田の目を、じっと見つめている一志。

○同・玄関

やや声を落として丈二、舞と話している町田。玄関の扉が開き、点滴の入っている段ボールを抱えた恵が現れる。

町田が恵を見る。

町田「加藤さん、もう長くはないかもしれないかもしれません」

町田の発言に、少し反応をみせる舞。

恵「そうなんだね。しっかり痛みを取ってあげないとね」

どこか他人事のような表情の恵。

○同・玄関先

町田が車の後部座席の扉を開けて、車に乗り込もうとする。丈二が玄関の扉を開けて町田を見る。

丈二「先生、兄貴が話あるって」

○同・寝室

町田が部屋に入ってくる。一志が申し訳なさそうな表情で町田を見ている。

一志「町田先生、すまないね」

町田「いえいえ、どうかされましたか？」

一志は一呼吸置いて、話し始める。

一志「俺もう長くないんだろ？」

町田が一志の目の奥を見ている。

町田「進行が思ったより早そうです……」

一志が町田を見ながら頷く。

一志「自分の死が近づいてくると、昔の記憶を思い出すよ。俺は本当どうしようもない父親だ」

一志「俺が恵だったら、確かに父親の事は見

たくもないだろうな」

町田が黙って聞いている。

一志「人生の締めくくりとして、俺は面と向かって、恵に謝りたい……」

一志の右手には紫色のヒヤシンスがラミネートされた葉が握られている。一志の目の奥に宿る強い意志を感じ取る町田。

町田「加藤さん……」

○同・玄関先

停まっていた車の後部座席の扉を開けて、乗り込む町田。

○車内・後部座席

恵が車を運転している。町田が意を決した表情で運転席の恵に視線を向ける。

町田「金城さん」

恵「どうしたの？」

町田「加藤さんともう一度話すことはできま

せんか？」

数秒間、車内に沈黙が流れる。

恵「私は特に話すことはないけど……」

町田が黙って下を向いている。

恵「あ、ちょっと寄り道していい？」

町田「はい」

助手席には生活消耗品が詰め込まれた

○坂本宅・玄関前（夕）

車内で待っている町田。玄関先に立っ

ている恵。玄関の扉を開き、坂本真智

子（64）が姿を現す。恵は生活消耗

品が入った袋を真智子に手渡す。談笑

している恵と真智子。

○車内・後部座席（夕）

運転席の扉を開けて、乗り込む恵。

恵「ごめんね、待たせて」

町田「金城さん、あの方は？」

恵「ああ、私の叔母よ」

恵「一時期、私と母がお世話になっていて……。最近は足悪くなっちゃってね」

町田「そうなんですネ」

○金城宅・ダイニング（夜）

恵、息子の金城凧（7）、夫の金城朋也（40）の三人が椅子に座って夕食を取っている。

朋也「凧、今日学校楽しかった？」

凧「うん、溜衣さんと遊んだ！」

恵「よかったわね、何して遊んだの？」

凧「砂場で、お城作った」

朋也「お城か、すごいなあ」

凧「溜衣くん、最近おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に旅行行ったんだって」

凧「ママのおじいちゃん、おばあちゃんにも会ってみたい！」

やや表情が硬い恵だが、すぐに笑顔で

凧のを見る。

恵「ママのおじいちゃん、おばあちゃんはね、
遠くにいて会えないの。ごめんね、風」

朋也が心配そうな表情で恵を見ている。

○有料老人ホーム花・個室（夜）

中田稔（85）がベッドで寝ている。

町田が、死亡確認を実施している。

中田 智（55）、井川 遥（50）

がベッド横に立っている。横に立って

いる恵にペンライトを返す町田。

町田「22時50分、ご臨終です」

町田が頭を下げる。

智「本当に先生、いろいろとお世話になりました」

井川「最初は具合が悪くなったら、病院へつ
て思っていたんですけど、先生の言う通り
病院搬送していたら、父が慣れたんだ生
活はもう二度とできなかつたかもしれませ
んね」

町田は壁に貼られている施設外の花壇

で撮られた写真を見ている。稔、智、井川が映っており、稔が写真の中心で盆栽を持って笑顔で写っている。

井川「最後に父と一緒に過ごせる時間をたくさん作ってもらってありがとうございます。ありがとうございました」

井川と悟が町田に向かって、頭を下げる。町田が何か心に決めた表情をしている。横にいる金城が黙って聞いている。

○坂本宅・玄関前（昼）

玄関先に町田が紙袋を持って立っている。インターホンを押す町田。

真智子（声）「はい、どちら様ですか？」

町田「はじめまして、村井訪問診療所の医師の町田と申します」

玄関の扉が開く。真智子が立っている。

真智子「恵のところのお医者さん？」

名札を見せる町田。

町田「休日に申し訳ありません。少し金城さんの事でお伺いしたいことがあります」
やや怪訝そうな表情を浮かべて少し考
えている真智子。

真智子「玄関先なのもアレだから、上がって」
町田を玄関に招き入れる。

○同・居間

居間のテーブルを挟んで、町田がやや緊張の面持ちで座っている。真智子が入れてきたお茶を、町田の目の前に置く。軽く会釈する町田。町田が紙袋から、菓子折りを出す。

町田「すみません、これよかったですらどうぞ」

町田が菓子折りをテーブルの上に置く。

真智子「そんな、気遣わなくていいのに」

町田「いえいえ、急な伺いですいません」

真智子「先生、恵のことで話があるって？」

町田「はい、金城さんの過去を教えて欲しくて」

真智子「恵の過去？」

真智子が湯呑のお茶を一口飲んで、
湯呑をテーブルに置く。

（回想はじめ 二十二年前）○アパート・居
間（夕）

T「二十二年前」

机の上に一升瓶が置かれている。湯呑
に酒を注いで飲んでいる加藤一志（4
8）。妻の加藤（坂本）悦子（45）
が呆れた顔で見ている。

悦子「あなた仕事は？」

一志「休みだよ」

悦子が怒りの表情で、机の上の一升瓶
を取り上げる。

一志「何すんだよ！」

悦子「なんでもっと家族のことを考えてくれ
ないの？ 結婚してあなたに借金があるっ
て知って、私は仕事も子育ても一生懸命に
やってきた」

悦子「それなのに、あなたはいつまでたっても定職には就かない、恵の面倒もみなくなくなった」

一志がイライラしながら聞いている。

一志「俺だって精一杯やっているんだよ！」

一志が思わず、飲んでいた湯呑を壁に投げつける。湯呑みが壁にぶつかり、割れて粉々になる。

○同・玄関（夕）

玄関の扉が開いて、娘の加藤（金城）

恵（14）が入ってくる。

恵「ただいま」

上着を羽織りながら、一志が玄関に向かってくる。

恵「酒臭い……どこいくの？」

恵が不快な表情を浮かべて一志を見ている。

一志「なんでもいいだろ」

恵を押し除けて、玄関の扉を開けて外

に出ていく一志。

恵「ちよつと、ねえ！」

恵が居間を見ると、割れた湯呑を泣きながら片付けている悦子の姿がある。

○同・玄関前（昼）

買い物から楽しげに帰ってくる悦子と恵の二人だが、玄関前に立っている取り立て屋の村田（30）と田村（30）の姿を見て表情がこわばる。村田は帰ってきた悦子の方を見る。

村田「加藤悦子さん？」

悦子「はい：どうしたんですか？」

村田「お宅の旦那さんの一志さんなんですけど返してくれないんですよ」

悦子の前に、借金の督促状を見せる。督促状を見て呆然とする悦子。

村田「旦那さんが払えないなら、奥さん払ってもらわないと困りますよ」

田村「まあ、金稼ぐ方法はいくらでもあるわ

な」

田村が恵に顔を近づけている。恐怖で悦子の腕を掴んでいる恵。悦子が恵を抱き寄せ、何か決心したような表情を浮かべる。

○同・居間

一志と悦子が机を挟んで向かい合って座っている。イライラしながら悦子を見る一志。

一志「話ってなんだよ」

悦子がカバンから離婚届を出して、机の上に置く。驚いた表情を見せる一志。

一志「お前……」

悦子「ここに判を押して」

一志「なあ、冗談だろ。話し合おう」

軽く笑いながら、悦子の肩に手を伸ばすが、悦子がその手を振り払う。

悦子「私と恵の人生まで奪わないで！ お願いだから……」

悦子が泣きながら、一志の顔を見る。

○坂本宅・玄関先

坂本真智子（42）が玄関を開ける。

悦子と恵が立っている。真智子の姿を

見て会釈する恵。

（回想終わり）

○坂本宅・居間

町田と真智子が向かい合って座っている。

真智子「離婚した直後は、ここに三人で住んでいてね。二人ともそれまでの生活が嘘み
たと言って言っていた」

真智子「それから落ち着いた二人は、新しく探した家に越していったわ」

（回想はじめ 十二年前）○レストラン・テーブル席

坂本（加藤）悦子（55）と坂本真智

子（52）がランチをしている。

T「十二年前」

真智子「恵、仕事どうだった？」

悦子「今年目で覚えること多くて大変だった。働き始めてから親元離れて、ちよつと

寂しいけどね」

真智子「一人娘だもんね」

悦子と真智子が談笑している。悦子が、少し頭痛を感じてこめかみ付近を手でおさえている。心配そうに悦子を見る真智子。

真智子「大丈夫？」

悦子「大丈夫よ」

真智子「働きすぎじゃないの？」

悦子「恵が自立したから、前ほどは働いていないわよ」

笑いながら真智子を見る悦子。横に置いていた紙袋から便箋の束を取り出す。

悦子「去年から、実家に届くようになったの」

悦子は便箋の束を真智子の前に置く。

真智子が便箋の一つを手にとる。表には「坂本悦子 坂本恵 様」と書かれている。差出人を確認するため裏返すと「加藤 一志」の名前が書かれている。

悦子「最初は処分してって親に言おうと思っただけだね。試しに読んでみたの」

真智子「どうだったの？」

悦子「反省文の嵐って感じよ。あの後、定職について借金は返済したみたい。もう一回三人で会えないかって……」

悦子「その繰り返しよ」

悦子は横に積み上げている便箋の束を見つめて、ため息をつく。

真智子「恵には？」

悦子「タイミングが中々無くてね」

真智子「そうなんだ……」

悦子「……彼は恵のたった一人の父親なのよね」

下を向いて悩んだ表情をしている悦子。

悦子「ちょっとお手洗い行ってくる」

立ち上がったって歩き出す悦子だが、卒倒して床に倒れる。

真智子「悦子！」

物音に気付いて、倒れている悦子に急いで駆け寄る真智子。

○メデイカルセンター寄宮・ナースステーション

ヨン

デスクで座って作業をしている坂本

(金城) 恵(24)。受話器を片手に

看護師リーダーの川崎(50)が恵に

声を掛ける。

川崎「坂本さん、電話よ」

恵が不思議そうな表情で、川崎から電話の受話器を受け取る。

恵「もしもし、坂本です」

真智子(声)「恵？ 真智子よ。落ち着いて

聞いてね、お母さんが――」

恵「え……」

呆然とした表情になる恵。

○前田救命センター・霊安室

寝台の上に人が寝ている。霊安室の扉を開けて恵が入ってくる。八木直久

(38)が恵の姿を見て近寄る。寝台の横には真智子が立っている。

八木「坂本悦子さんの娘さん？」

恵「はい、そうです……」

八木「お母さんが心肺停止で運ばれてきて、

懸命に処置をしたんだが……」

恵「そんな……いや。お母さん、お母さん！」

寝台の横に駆け寄って、寝台の上に寝ている悦子を見て、泣き崩れ落ちる

恵。恵の肩を抱き寄せている真智子。

(回想終わり)

○坂本宅・居間

なんとも言えない表情で真智子の話を聞いている町田。真智子が戸棚から、

便箋の束を持ってきて、机の上に置く。

真智子「なかなかこれを渡す機会がなくてね」

町田が便箋の束を見ている。

町田「これ、預からせてもらってもいいですか？」

真智子が驚きの表情で町田を見る。町田が真剣な表情で真智子の目を見ている。

町田「金城さんがこれを読むタイミングは今のしかないかもしれません」

○居酒屋・カウンター（夜）

町田がカウンターに座ってジョッキでビールを飲んでいる。玄関の扉が開いて鈴の音になる。居酒屋店主の覚知（50）が玄関をみる。

覚知「いらっしやい」

町田の左隣に座る居宅ケアマネージャの山崎香織（55）。

山崎「生で」

山崎の目の前に生ビールジョッキが置かれる。ジョッキを一気に飲み干す山崎。

山崎「おかわり」

町田の顔をみる山崎。

山崎「で、なによ話って、先生？」

町田「加藤さんを外出させたいって考えています」

ビールを飲んでいた山崎が若干むせる。

山崎「今のお身体の状態から、どこにどうやって、連れていこうと考えているの？」

町田がメモを山崎に渡す。

メモを見て渋い顔をする山崎。

町田「山崎さんの助けなしには不可能なんです、お願いします」

山崎「先生、本気なの？」

町田「医学的な問題は僕がなんとかします」

町田が山崎へ深々と頭を下げる。

もう一度メモを見る山崎。

○村井訪問診療所・オフィス（夕）

恵が作業を終わり立ち上がる。町田、村井や五十嵐はまだ座って作業をしている。

恵「お疲れ様でした」

恵が帰ろうとしているところを呼び止める町田。

町田「金城さん、ちょっといいですか？」

○同・応接室（夕）

町田と恵が対面でソファーに座っている。町田の横には紙袋が置かれている。

町田が紙袋から便箋の束を取り出して、机の上に置く。

町田「先日、こんなものを叔母さんから預かりました」

驚いた表情の恵が便箋の一つを取り、表裏を見ている。少しうんざりした表情で町田を見る恵。

恵「これどうしたらいいの？」

町田「読むんだったらこのタイミングしかない
と思っています」

紙袋に便箋の束を戻して、恵に紙袋を
手渡す町田。黙って紙袋を受け取る恵。

○車内・運転席（夜）

運転している恵。助手席に置いてある
紙袋を一瞬見る。

○金城宅・居間（深夜）

机の上に便箋の束が置かれている。
恵が便箋の一つを読んでいる。

○加藤家・寝室

町田、舞、五十嵐の三人が立っている。
寝室内にレンタルされた電動車椅子が
置いてある。

町田が舞と五十嵐の方を見る。
五十嵐と舞が町田を見て頷く。

町田が一志に視線を移す。

町田「加藤さん、今日お出かけしてみませんか？」

一志「え、大丈夫なのか？」

町田「僕たちがサポートしますんで」

町田が一志を見てにっこり笑う。

○同・玄関前

酸素カニユールをつけて電動車椅子に乗っている一志。携帯用の酸素ボンベを持っている五十嵐。シリンジポンプをチェックしている舞。

電話をしていた町田が電話を終える。

町田「もうすぐ来ますよ」

町田が笑顔で一志を見ている。

目の前に一台の送迎車が現れる。

送迎車の運転席から颯爽と降りてくる

山崎。

山崎「久々に運転するわ」

山崎「調整大変だったんだから。今度なんか奢ってもらおうわよ、先生！」

山崎が町田に近づき、町田の尻を叩く。
一瞬表情を歪める町田だが、山崎の方
を笑顔で見る。

町田「山崎さん、ありがとうございます」
頭を下げる町田。頷く山崎。

○浦添公園・外観

車内で待機している五十嵐と山崎。
山崎がポテトチップスの袋を開けて、
豪快に食べている。

○同・ベンチ

ベンチ横で電動車椅子に座っている一
志。ベンチに座って酸素の残量やシリ
ンジポンプをチェックしている舞。
一人の女性がベンチの前に現れる。
女性を見上げる町田、舞、一志の三人。
町田はほっとした表情、一志と舞は驚
いた表情で女性を見ている。

一志「恵……」

町田「金城さん」

町田が金城から舞の方へ、視線を移す。

町田「鈴木、酸素もポンプも大丈夫そう？」

鈴木が頷く。

舞「金城さん、何かあったら連絡してください」

い、近くにいますので」

町田と舞を見て頷く金城。町田と舞が

その場を去っていく。

○同・ベンチ

電動車椅子に座った一志とベンチに座っている恵が、緊張の面持ちで横並びになっている。一志が恵の顔を見る。

一志「恵……」

恵「どうしたの？」

恵はちらっと一志見るが、目を合わさうとしない。

一志「最近、元気か？」

恵「元気よ」

素っ気ない返事をする恵。

一志は、紫色のヒヤシンスがラミネー
トされた一枚の葉を恵に見せる。

一志「もう三十年前かな、覚えてないか
もな……」

紫色のヒヤシンスを見つめている恵。

（回想はじめ 三十年前）○浦添公園・ベン
チ

T「三十年前」

ベンチの前の砂場で楽しそうに遊んでい
る加藤（坂本）悦子（37）と加藤（金
城）恵（6）。加藤一志（40）が公園
のベンチに姿を現わし、悦子と恵の姿を
見つけて近寄る。悦子が少しうんざりし
た表情で一志を見る。

悦子「遅いよ、もう」

一志「ごめん、長引いて……」

一志の左手は資格習得の参考書を抱えて
いる。

恵「パパ！」

恵がパパの元に駆け寄ってくる。

恵を抱きあげる一志。

一志「恵、ごめんな、待っただろ」

恵「パパ、遅い」

○同・外観

紫色のヒヤシンスが咲いている。ヒヤシンスを見つけて、笑顔で紡ぐ恵。恵が、一輪のヒヤシンスを持って、ベンチの方
向へ走って戻っていく。

○同・ベンチ

ベンチに座って参考書を広げている一志の視界の先に、ヒヤシンスの花を手に握って立っている恵の姿がある。

一志「綺麗だな、恵」

恵の頭を撫でる一志。

思わず一志の懐に飛び込む恵。

恵の突発的な行動に少し戸惑いながら

も恵を抱き寄せる一志。

一志「恵？」

顔を上げた恵は、横の参考書をちらりと見て、一志の目を見ている。

恵「もっとパパと一緒にいたい」

一志「最近一緒に遊べなくて、ごめんな」

恵の頭を優しく撫でる一志。

恵「パパは恵とママを幸せにしてくれる？」

笑顔で恵を見て頷く一志。

一志「パパ約束する、恵とママのことを絶対に幸せにする。パパは世界に一人しかいないから」

恵「パパは世界で一人？」

一志「そうだよ」

恵「ずっと恵とママのそばにいてくれる？」

一志「もちろん」

一志は恵の頭を優しく撫でる。

恵がにっこり笑う。

恵「だったら、これパパにあげる」

笑顔で手に握っているヒヤシンスを一

志に渡す恵。ヒヤシンスを受け取る

一志。悦子が笑顔で一志と恵のやりとりを見ている。

（回想終わり）

○浦添公園・ベンチ

電動車椅子に座った一志が恵の顔を涙ながらに見る。

一志「なあ、恵。俺は最低な父親だ」

恵が黙って聞いている。

一志「恵とママとの約束……守れなかった」

一志が恵に向かって深々と頭を下げる。

一志「恵とママを幸せにできなくてごめん、

本当にごめん……」

一志の頬を涙が伝っている。

恵「もういいよ」

恵が、カバンの中から便箋の束を出して一志に見せる。驚いた表情の一志。

恵「こんなに手紙を寄越したからって、私と

ママの時間は戻らないの……」

恵は、紫色のヒヤシンスがラミネート

された葉をもう一度見る。恵の頬を涙が伝っている。

恵「正直、パパが他の人だったらって……何

回思ったことか……」

恵「でも……私のパパは世界に一人しかいな

いのよね？」

涙ぐみながら、一志を見る恵。

○同・外観

町田と舞が、車の外でベンチのやりとりを見ている。

舞「これって町田先生の案？」

町田「患者さんの希望を叶えただけだよ」

町田が舞を見てにっこり笑う。

舞が優しい表情で町田を見る。

○加藤宅・玄関

玄関の扉を開ける丈二。目の前には恵、朋也、凧の三人が立っている。少し驚きながらも笑顔で招き入れる丈二。

○加藤宅・寝室

凧がベッドに寝ている一志の鼻カニユ
ーレをいじっている。一志が笑顔で凧
を見ている。恵と朋也も笑顔でその光
景を見ている。

○墓地・墓石前

「坂本悦子之墓」と墓石に書いてある。
電動車椅子に座って手を合わせる一志。
横に立っている恵と真智子。

○加藤宅・寝室

一志が寝ている。町田が死亡確認を行
っている。一志の手にはヒヤシンスの
葉が握られている。一志のベッドの周
りには丈二、恵、朋也、凧が立ってい
る。恵が町田の方を見る。

恵「ありがとう、町田先生」

町田が黙って頷く。

○村井訪問診療所・オフィス（夕）

村井、町田、五十嵐が自身の席に座って作業をしている。五十嵐の目の雨に
ある電話が鳴る。受話器を取る五十嵐。

五十嵐「はい、村井訪問診療所です」

電話のやり取りをしている五十嵐。

五十嵐「少々、お待ちください」

五十嵐が保留中にして、町田の方を見る。
る。

五十嵐「町田先生」

町田が五十嵐の方を見る。

五十嵐「赤田さんが、熱だしているみたいですが、
ですけど、どうしますか？」

町田「熱？　なんか症状はあるんだっけ？」

五十嵐「特にはないみたいです」

町田「取り置きの解熱剤で様子みてもらった
ら？」

村井が二人のやりとりを不安そうな表情で
情で見ている。

五十嵐が頷き、保留中のボタンを解除して受話器を手に取りとうとするが、横から村井が現れて、受話器を取る。

村井「もしもし、院長の村井です」

受話器を片手にやりとりをしている村井。

村井「そうですか、わかりました、すぐに伺います」

町田と五十嵐の方を見る村井。

村井「町田先生、すまないけど今から往診に行ってくれないかな？」

町田「熱だけですよね？解熱剤で様子見よう

かと……」

村井「町田先生、行ってくれないか？」

町田は、村井の目からただならぬ雰囲気を感じる。

町田「わかりました。五十嵐くん、行こう」
半信半疑な表情で立ち上がり、準備を始める町田。町田の姿を真剣な眼差しで見つめる村井。

○車内・運転席（夕）

五十嵐が運転している。後部座席に座っている町田。五十嵐がバックミラーで町田の方を見る。

町田「解熱剤の指示でもよかったと思うけど

な、俺は……」

五十嵐「なんかさっきの院長の目つき、怖く

なかったですか？」

町田「五十嵐くんも感じた？」

五十嵐「はい、初めて見ましたよ」

何か腑に落ちない表情の町田。

○村井訪問診療所・オフィス（夕）

村井がデスクの引き出しから一枚の写真を出す。写真には左端から村井正和

（35）、ケン（50）、八木直久

（35）が笑顔で写っている。

写真を険しい表情で見ている村井。

(第七話 「村井訪問診療所」に続く)